

『奥の細道』の読者意識

——享受史研究のための序説——

一 はじめに

『奥の細道』（本稿、以下「細道」と略す）は、いったいどのような「読者」を念頭におきながら書かれた文学作品なのか——一見陳腐な問いかけではあるが、今回改めて従来の研究史を見直してみたところ、意外にもこの問いに関する定説というものは見つけれなかった。それどころか、後述するようににそもそも『細道』は「読者」の存在を意識して書かれていたのか、ということについてさえさまざまな見方が存しているようなのである。

本稿は、以上のような研究の現状をふまえ、『細道』の読者意識について改めて整理・検討を行い、そこから新たな問題点を探り出すことを目的とするものである。

二 読者意識に関する諸説の収集と分析

はじめに、この問題について従来どのような説が出されてきたのか、確認しておこう。従来論ずるまでもない自明のことと考

られていたのか、『細道』の読者意識ということを具体的に論じた文献はあまり見られなかった。その中から、管見に入ったものを説ごとに分類して掲げてみる。⁽¹⁾⁽²⁾

(イ) 芭蕉には積極的な読者意識はなかったとする説。

a 出版する意図も、親しい門人たちに見せようとする意図もなかったとするもの。（阿部喜三男説・西村真砂子説）

b 親しい門人程度には見せたかもしれないが、出版して広く世に問おうという気持ちまではなかったとするもの。

（杉浦正一郎説・櫻井武次郎説）

b' 具体的に「兄半左衛門一人」に読んでもらうために書いたとするもの。（村松友次説）

(ロ) 芭蕉には積極的な読者意識があったとする説。

a 具体的な読者層までには言及していないもの。（白石俤三説・今米蔵説）

b 『細道』は「晴」の作品であり、「不特定多数の読者のために作った」とするもの。（復本一郎説）

金子俊之

一見して明らかなように、従来の『細道』の読者意識に対する見方は、これを完全に否定するものから不特定多数の読者を意識していたとするものまで、かなりのばらつきのあることが知られる。加えてこれらの諸説では、概して先行研究への目配りがじゅうぶんでなく、ゆえに研究史としては、読者意識について否定的な論が出されてはその反論が書かれるといったことが繰り返され、いまだに定説が確定しないという状況が続いているのである。その要因として、筆者は従来の研究には大きく二つの問題点があったと考える。一つは、読者意識という問題が、芭蕉に「細道」を出版する意志があったか否かという視点で論じられていることである。たしかに、近世という時代は一般に「出版文化の時代」と言われ、「読書」の概念もそれ以前と大きく変わったということができる。すなわち、出版という現象によって、一作品における「読者」数がそれ以前とは比べ物にならないほど増加したということなのであるが、従来の議論において問題なのは、そのことが、あたかも出版された作品には読者意識があり（強く）、逆に出版されなかった作品には読者意識がなかった（強くなかった）かのように理解されている節が見受けられることである。右に示した『細道』の読者意識をめぐる諸説においても、おそらくはそうした傾向が少なからずあったのではないかと思われる。しかし谷脇理史氏は一連の論考⁽³⁾において、西鶴の読者意識が、処女作「好色一代男」（天和二年（一六八二）刊）においても、後年の「日本永代蔵」（貞享五年（一六八八）刊）においても、さほど変わらなかったと論じられている。これは、単なる「転合書」――

すなわち出版をまったく意識していなかった――として執筆された「一代男」と、当初から出版を前提として執筆された「永代蔵」とで、西鶴の念頭にあった「読者」層にはほとんど差がなかったということを論じたものである。また、中野三敏氏がたびたび言及の対象とされている「近世木活字本」と称される書物も、版本という形式こそとしてはいるが、実際には秘密出版、あるいは写本と同等のものとしてごく限られた「読者」を対象に出版されたのであり、従来の議論が前提としているであろうような版本における読者意識の考え方とは異なった例として指摘することができよう。石原千秋氏「漱石と三人の読者」講談社現代新書、平成一六年）によると、書き手（作者）にとつて「読者」には、具体的な何人かの読者（「あの人」・自分の文章が発表されるメディアにおいて想定される読者（「何となく顔の見える存在」・自分の予想だにしなかった読者（「顔のないのっぺりした存在」）の三種があるというが、これに従って考えるならば、出版の意志のあるなしによつて影響されるのは後者二種類の「読者」数であり、本稿で問題とするような、芭蕉の念頭にあった「読者」（「具体的」「あの人」の存在）を考えるうえでは必ずしも有効な判断材料とはならないと思われる。

そしてもう一つ重要な問題として、従来の諸説が掲げる根拠にも注意しておく必要がある。『細道』の読者意識について否定的な見方をとる諸説（イ）の諸説では、先に述べた出版の意志という問題や、『細道』明和版本に付される去来跋文に、

外題は金の真砂ちらしたる白地にミづから奥の細道と書、年

月頭陀の内にかくして、行先くゝに隨身し給ふ。元禄七年水無月、予が方に偶居ましくゝてかつゝほのめかし給ふを、

(明和九年(一七七二)版本。傍点筆者)

とあることなどを根拠としている。他方『細道』の読者意識を肯定的に考える諸説(ロ)の諸説では、『元禄七年三月七日付會良宛依水書簡』、あるいは門人たちの編になる俳書類の中に『細道』本文と非常に近い記述が見られることを根拠とし、芭蕉が『細道』をまったく人に見せようとしなかったとは考えられないという論を展開させている。しかし不思議なことに、これらのどの説においても、芭蕉自身の言説、あるいは『細道』の本文自体が根拠として取り上げられることは、一切なかったのである。

たしかに、後述するように芭蕉自身の言説や『細道』本文の中に、こうした問題を解く手がかりが決して多くないという側面は否定できない。しかしそのような数少ない手がかりを再検討でもしてみないかぎり、今後もいたずらに堂々めぐりが繰り返されるだけであろう。このような研究史の現状にかんがみ、本稿では以下できるかぎり芭蕉自身の言説や『細道』本文に即して検討を加えることとし、まずは『細道』がそもそも「読者」の存在を意識して書かれているのかという問題から解決をはかることとした。

三 「細道」の読者意識に関する検討(一)

——「笈の小文」「紀行論」に即して——

本節では、読者意識に関する芭蕉自身の言説として、『笈の小

文』(乙州編、宝永六年(一七〇九)刊)所収の、いわゆる「紀行論」を取り上げて、その内容を検討する。

抑、道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼の、文をふるひ情を盡してより、余は皆佛似かよひて、其糟粕を改る事あたはず。まして浅智短才の筆に及べくもあらず。(中略)されども其所くゝの風景心に残り、山館野亭のくるしき愁も、且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ所くゝ跡や先やと書集待るぞ、猶酔乱者の怪語にひとしく、いねる人の謔言するたぐひにみなして、人又亡聴せよ。⁽⁶⁾

はじめに、「紀氏・長明・阿仏の尼の」の一節に注目してみよう。これは、芭蕉が彼らの紀行文こそ自作の手本であると高く評価していたことを示したもので、それらは具体的に『土佐日記』『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』と比定されている。そこでまず、これらの作品では「読者」がどのように意識されていたのか、その痕跡を探ってみたところ、

・此品、家を出し始、道に入し時、身のおはれに催されて、人の嘲をかへりミず、愚懷のためにこれを記す。他興のためにこれをかかず。⁽⁷⁾

(海道記)

・目に立つ所々、心とまる節々を書き置きて、忘れずしのぶ人もあらば、おのづから後の形見にもなれとてなり。⁽⁸⁾

(東関紀行)

といった記述が見出された。『海道記』の一文は、最近発表の三角洋一氏の論考⁽⁹⁾にも明言されているように、同作が「愚懷のた

め」、すなわち「出家後間もない個人的な感懷や思索」を記したと述べているのであり、その後には「名所案内や旅情の満喫を期待するならば失望しますよ」という意味の一文が続いてゆく。

よって、言うまでもなくこれらは『海道記』の読者に向けて発せられた文言、ということになる。また『東関紀行』の傍線部は、「私のことを忘れずに思い出してくれる人があるとするならば」という意であり、ここからは作者の念頭にあった「読者」が、自身と面識のあるごく身近な人物であつたらうことがうかがわれる。これらの文章から、芭蕉が高く評価していた紀行文では、「読者」の存在が強く意識されていたということがまず確認されるのである。

そして、この「紀行論」末尾にある「人又亡聴せよ」という文言もまた、芭蕉の読者意識をおしはかるうえで注目し値する。この一節は、諸注が等しく指摘するように、「莊子」「齊物論」篇の、「予レ嘗ニ汝ガ為ニ之ヲ妄言セン、女以テ之ヲ妄聴セヨ」をふまえたものと考えられる。しかも「亡」の字には、「莊子」「庚桑楚」篇に、「汝亡人ナルカナ、惘惘トシテ、汝、汝ガ情性ニ反ラント欲ストモ」という用例があり、これを林注では「亡人ハ其ノ本心（筆者注——正氣、の意）ヲ失フ人ナリ」と注しているのである。よって、「亡聴」の語は「みだりに聞く、考えなしに聞きながす」といった意に解されるわけである。以上のことをふまえつつ、ここでは特に「人」「亡聴」の語をきちんと訳し出している上野洋三氏の口語訳を援用するが、それによれば、この一節は「読者もまあ、ほんとうにそんな程度のものだと思って、どうぞ

適当に、聴きながしていただきたい」と、「人（＝読者）」に対して「亡聴せよ」と呼びかけたものであり、表面上の語義とは逆に「芭蕉が自分の日記を人に読んで貰いたいと期待していた」ことは明らかなのである。以上のようにこの「紀行論」からは、芭蕉自身が明確に何らかの「読者」の存在を意識していたことがうかがえ、よってそうした紀行文観に基づきつつ執筆されたと思われる「細道」の読者意識についても、その例外ではなかったと考えることができるのである。

四 「細道」の読者意識に関する検討（二）

——「細道」本文に即して——

では次に、「細道」本文の中に、芭蕉の読者意識がうかがえると思われる表現を求めてみよう。特にここでは、芭蕉自身の関与がある程度裏づけられる曾良本を対象に考察を進めてゆく。

（二）振り仮名・連読符号の持つ意味

——「音読」の問題を一つの視座として——

まずはじめに、曾良本の随所に見られる振り仮名や連読符号の存在に注目してみよう。同本には、朱・墨あわせて振り仮名が二七箇所、連読符号が五〇箇所に付されている。その中で、「往来の人の表^{ウキ}をあらして」（24—3行目）、「むかしよりよみ置る哥枕、多くかたり伝ふといへとも」（33—2行目）などいくつかの振り仮名に関しては、むしろ誤写を防ぐために付されたもので、他とは性格を異にしていると見ておくべきかもしれない。しかし、それを除いた大多数（特に連読符号）について、実際に人に「読ま

れる」ことを前提としたものと見ることに問題はないであろう。

とりわけ尿前の関の箇所、地名には「尿前」(44—2行目)、発句には「馬の尿する」(44—8行目)といった具合に振り仮名を付して読みを明示しているところなどは、明らかに「読者」の存在を意識した所為だと考えられる。「細道」が芭蕉だけのための個人的な作品であったとすれば、このような振り仮名をわざわざ付す必要などないからである。

ところで、今日「読書」と言った場合、おそらくは「黙読」ということを連想するのが一般的であろう。しかし、前田愛氏「音読から黙読へ——近代読者の成立」(『近代読者の成立』岩波現代文庫、平成一三年)が述べるように、「読書」黙読」という図式が成立したのは「ごく近年、それも二世代か三世代の間に過ぎ」ず(一六六頁)、実際のところは比較的最近まで「音読」されるということが広く行われてきたのであった。したがって、右に指摘した振り仮名や連読符号なども、実際に「音読」されることを期待して付されたものと考えられる。さらにそれに関連して興味深く思われることには、芭蕉の言説を伝える「元禄三年八月上・中旬ごろ筆(推定) 去来宛書簡」の中にも、「音読」に関する次のような一文を見出すことができるのである。以下、該当箇所を引用してみよう。

△発端行脚の事を云て、幻住庵のうとき由、難至極。(中略)
所々ハ御加筆くるしからず候間、能々御覽被^(a)成候而、^(b)他の
そしりをまぬかれ候様ニ可^(c)被^(d)成候。

△国分山に取付処、いま少よろしく風流あるべく候。(中略)

^(b)加生へも御見せ可^(b)被^(b)下候。何とハなしに此度惣体不出来
の由被^(b)申候由、^(c)気の毒ニ存候。此人申状も難^(c)捨候間、
^(c)又々御よミきけ可^(c)被^(c)下候。

この書簡は、俳文「幻住庵記」の推敲段階において、芭蕉が去来やその兄向井元端に文章の添削を依頼したことを伝えるものとしてよく知られている。傍線部^(a)はそうした添削依頼をする理由を述べたものであるが、ここではそれが「他のそしりをまぬかれ」るためであったとされていることに注目しておく必要がある。すなわちこの一節によつて、「幻住庵記」が「読者」の存在を意識して書かれていたことがまず裏づけられるのである。

さらに芭蕉が、その「幻住庵記」について、去来や元端ばかりではなく加生(凡兆)にも意見を求めていた(傍線部^(b))こともよく知られているわけであるが、ここでさらに注目されるのは、「加生へも御見せ」する際に「よミき」かせる、すなわち音読して聞かせる、という方法がとられていたことである(傍線部^(c))。

「芭蕉全図譜」に収められている「幻住庵記」の諸本五点(243—247、および「猿蓑」(元禄四年(一六九一)刊)所収の「幻住庵記」本文を参照してみると、本文に振り仮名や連読符号は一切付されていないのであるが、右の書簡からは、その「幻住庵記」が明確に「読者」の存在を意識した文章であったこと、そして時に「音読」もされていたことが確認される。となると、振り仮名や連読符号によつて「音読」されることが期待されていたと見られる「細道」もまた、何らかの「読者」の存在を念頭に置きながら執筆された作品と見ることが許されるであろう。

(二)「細道」本文から見た読者意識

では今度は、「細道」本文に視点を移してみる。はじめに取り上げるのは、「出羽三山」の中に記される、以下の一節である。

惣而此山中の微細、行者の法式として、他言する事を禁ず。

仍て筆をとめてしるさす¹⁶。

これは出羽三山を訪れた修行者の掟として、山中の様子を他言することは固く禁じられているのでそれに従った、という一文である。つまり、芭蕉が「筆をとめてしるさ」なかったのは、山中の様子を他言しなかつたのであり、ゆえにこの文章が何らかの「読者」の存在を意識して書かれていることは明らかだと言える。

また、「細道」の中には、芭蕉がそうした「読者」に向けて発していると思われる文言もいくつか見出される。たとえば汐越の松の箇所、伝西行歌「終夜風に波をはこばせて月をたれたる汐越の松」の後に記された、「この一首にて数景盡たり。若一辨を加れるのは、無用の指を立るがごとし。」という一文、あるいは、「松島」の章段、「抑、事ふりにたれど、松嶋ハ扶桑第一の好風にして、をよそ洞庭・西湖を恥ず。」のうち、推敲の際墨によって書き加えられた、「事ふりにたれど」の文言などがそれである。これらは、それぞれ「この西行歌に一言でも加えようとするのは無用なことだ」、「松島が日本第一の絶景であることは」多くの先人によってすでに言い古されていることではあるが」といった意味であり、何らかの「読者」の存在を意識した行文と見ておくのが自然である。特に後者は、書込前の「抑、松嶋ハ：」だけで

もじゅうぶん意味は通じるのであり、ここは明らかに「読者」に対する断りの文言だと考えられよう。

以上、いくつかの観点から検討してきたところを見れば、「細道」が「読者」の存在を大いに意識しながら執筆された作品であることは、もはや明らかと言える。これに対して、「細道」はあくまで一つの文学作品として執筆されているのだから、あまりに常識的な結論にすぎないのではないか、という批判もあり得よう。しかし、もしこれを「あまりに常識的な結論」と言うのであれば、それは逆に従来の議論が「あまりに非常識な」ものであつたということに他ならないのであり、その場合、なぜそうした議論が展開されてきたのか、研究史そのものを再検証してゆくことが必要になってくるものと思われる（たとえば、後述するような「細道」享受の問題などが、視野に入ってくることになるだろう）。このような意味において、いま一度こうした確認作業を行って、芭蕉が「ほそ道」をも人に見せたがらなかったのではないかという迷信のようなもの（前掲白石論文）を明確に否定しておくことは、決して小さくない意味がありそうである。

五 「細道」の読者層

以上の考察をふまえ、本節では「細道」が具体的にどのような「読者」を想定しながら書かれたのかということを、やはり限られた資料の中から推察してゆくことにしたい。

「細道」に読者意識があるとした諸説の中でも、具体的な読者層にまで言及されているのは復本一郎氏のみである。氏はまず、

もともと和歌用語として用いられていた「晴・藝」という術語を俳諧に應用、それぞれをへ晴〓不特定多数の読者のために作った作品、へ藝〓特定の読者のためにのみ作った作品（公開を意図しない場合も含む）と定義する。そして、人名や地名などに多く用いられる「うといふ」の言い回し、あるいは曾良本において、「等躬」という正しい人名表記が「等躬」という虚名へと訂正されていることに着目され、それらをそうした人名・地名になじみのない読者への配慮であると見て、「細道」は不特定多数の読者を想定して書かれた「晴」の作品であると結論づけられた¹⁷⁾。

しかしこの見解に対しては、そもそも「晴」の歌自体が不特定多数の読者を意識して作られていたとは限らないように思われる¹⁸⁾うえに、芭蕉自身の言説を伝える資料でもある『三冊子』・黒（土芳著 元禄一五年（一七〇二）成に次のような一節が見られることも問題となりそうである。

或年の旅行、道の記すこし書けるよし、物語あり。是をこひて見むとすれば、師の曰く「さのみ見る所なし。死して後見侍らば、是とてもまた哀れにて、見る所もあるべし」となり。感心なる詞なり。見ざれども哀れ深し¹⁹⁾。

この文章では、まず「さのみ見る所なし。死して後見侍らば」の文言から、芭蕉自身、少なくとも存命中には、その「道の記」を積極的に公表しようとは考えていなかったらしいことがうかがえる。また、つづく「是とてもまた哀れにて」の文言は、「かやうなものも亡き人（筆者注——芭蕉）を思ふ心のあはれから」といった意味で、先に見た『東関紀行』の「忘れずしのぶ人もあら

ば」とよく似通ったものと見ることができ。なお、この「道の記」が無条件に「細道」を指していると言えるかどうかについて検討の余地が残るところではあるが、それにしても、まず「東関紀行」の文章を大いに意識したうえで『笈の小文』『紀行論』が執筆され、その「紀行論」の内容を「細道」がある程度具現化している²⁰⁾と見る時、「細道」に関して想定されていた「読者」とは、復本氏の言うような不特定多数であるよりは、むしろ芭蕉とある程度面識のあるごく近い人々だったのではなからうか。

また、『笈の小文』『紀行論』末尾、「人又亡聴せよ」の「又」の語からは、この「紀行論」自体がすでに『笈の小文』以前の紀行作品——具体的には「野ざらし紀行」を指すと考えられよう——を読むことのできた人々を意識しながら書かれたのだと考えることができ、このことから「細道」の「読者」は、芭蕉とごく近い人々に限定されていたと見るのが妥当だということになるだろう。

そのほか「細道」本文の中にも、明らかにある特定の人物に向けて発せられていると思われる表現がいくつか見出される。たとえば、「武隈の松」の章段に出る「桜より松は二木を三月越シ」の発句は、江戸出立時に詠まれた、門人拏白の「たけくまの松みせ申せ遅桜」に対する挨拶吟であり、ここから少なくとも拏白が「細道」の「読者」として想定されていたことは間違いないところである。また「松島」の、

旧庵をわかる、時、素堂松嶋の詩有。原安適松がうらしまの和哥を送らる。袋を解てこよひの友とす。且、杉風・濁子発

句有り。

という一節の「袋を解てこよひの友とす」なども、いかにも素堂や安適に対する挨拶性の強い行文だと感じられる。ちなみに——これは客観的に論証するのは難しいことではあるが——、前節(二)で取り上げた三つの本文なども、不特定多数というよりは特定の「読者」を意識したうえで執筆されたものと思われる。

以上のようないくつかの根拠から、筆者は「細道」執筆時に芭蕉が念頭に置いていた「読者」とは、芭蕉と面識のある蕉門あるいはその周辺の人物で、しかも特に近い者たちに限られていたものと考えたい。復本氏は「桃翠」「等窮」「画工加右衛門」「清風」「図司左吉」「一笑」「北枝」「等裁」など、「くといふ」の言い回しで表現されている人物について、「芭蕉が『おくのほそ道』の読者として想定した不特定多数の人々の間では、知名度が低」かったのだと説明する。⁽²⁾しかしこの場合、筆者はむしろ「同行曾良が曰」「杉風が別墅に移るに」「素堂松嶋の詩有」など、「くといふ」を用いていない表現との違いにこそ注目するべきではないかと考える。より具体的に言うならば、桃翠・等窮・加右衛門らは、なぜ曾良たちに比べて一步客観的な筆致で表現されているのかという視点から、この問題は追究されるべきものと思われる。そこで以下、「元禄二年四月二十六日付杉風宛芭蕉書簡」⁽²²⁾を手がかりに、この点について補足しておく。

この書簡は、元禄二年(一六八九)の奥羽行脚の折の、黒羽立から須賀川滞在までの旅の概要について記したものである。そして、この書簡中に出現する人物の表現と、「細道」におけるそ

れとの対応関係を比べてみたところ、それぞれ以下のようになることがわかった(上が芭蕉書簡中の表現、下が「細道」中の表現。×印は、「細道」本文には記述がないことを表す)。

・城代図書と申方に逗留、↓黒羽の館代浄坊寺何がしの方に音信ル。

・須加川と申処二乍憚と申作者、↓須か川の駅に等窮といふものをたづねて、

・三千風仙台へ帰、↓×

・出羽清風も在所二居候よし、↓尾花沢にて清風と云ものを尋ぬ。

・宗波老、病氣も(如)何(に)候哉。↓×

・宗五無事二達者(に)被_レ致候。↓曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。

「くといふ」の言い回しをめぐっては、先に示した客観的な筆致という理解のほか、「世外の交わりにおける風雅の友としての親愛感にもとづく呼称」といった見方もあり、細かいニュアンスになお検討の余地が残されている。しかし通常書簡とは、発信者(この場合芭蕉)が受信者(この場合杉風)のみに読まれることを想定して書かれるものと考えられるから、そこから推察すれば、「くといふ」の言い回しによって表される城代図書や乍憚(等窮)は、杉風にとって未知(あるいはさほど親しい間柄にない)の人物であった可能性が高く、逆にこうした言い回しがとられない三千風・清風・宗波・宗五(曾良)などは、杉風にとって既知の人物であったと考えることができようである。そしてこのような見

方を「細道」にあてはめてみることで、その読者層は、曾良・杉風・素堂などのことはすでによく知っているが、芭蕉が奥羽行脚の折に出会った桃翠・等翁・加右衛門らとはさほど親しい間柄にはなかった人々、すなわち芭蕉周辺の人物と考えることができるのである。「うといふ」の言い回しは、おそらくは芭蕉が親しい人々に向けて、彼らを紹介するといった意味合いで用いたものなのだろう。

ところで宮崎莊平氏は、日記文学における「読者」の実態について考証された論考の中で、それが「物語の場合の享受者」や「後世の不特定多数の読者」などとは異なり、「作者の心情を理解してくれ、共感を寄せてくれる人」であることを指摘し、「限定的に用いて、共感者・理解者あるいは同情者と呼ぶのが実情に適っている」と述べられている。⁽²⁴⁾『笈の小文』『紀行論』から明らかのように、芭蕉は先行の日記紀行文学から大きな影響を受けていたのであり、その意味から言っても、「細道」の「読者」とは「共感者」とも言うべき、芭蕉とごく近い人々であったと考え、差し支えないということになるだろう。

六 おわりに——享受史研究への展開に向けて——

周知のように、「細道」は芭蕉没後の元禄一五年（一七〇二）元禄一二年説もあり、去來の尽力によって書肆井筒屋から公刊され、その結果元來芭蕉の念頭の範囲外にあった多数の「読者」に読みつがれてゆくことになったのであるが、このことは、今後「細道」を読者論という視点から検討してゆくうえで、決して小

さくない意味を持っているように思われる。それを「細道」における「虚構」の問題を例に述べてみたい。

「細道」が単なる旅の事実の記録などではなく、時に「虚構」をも交えつつ一つの文学作品として書き上げられていることは、今日でこそ常識として認知されている。しかしかつて拙稿で指摘したことがあるように、昭和一八年（一九四三）の『曾良旅日記』⁽²⁵⁾発見以前においては、このような見方はむしろ少数で、「細道」は旅の事実には忠実な記録として読まれることが一般的だったのである。すなわち、「細道」は「出版」という事象によって芭蕉の念頭にはなかった「読者」を獲得した一方で、本来の芭蕉の意図とは大きくかけ離れた読みをも生じさせることになった。その最たる例が、本文の随所に見られる『曾良旅日記』と一致しない記述を、「芭蕉の記憶違い」などと解するような類である。

そうした読みを成り立たせるにいたった背景として、「芭蕉は文章に於ても、句に於ても決して嘘は云はなかつた」といったような、いわゆる「俳聖芭蕉」のイメージが大きく影響したと想像するのは、基本的に誤りではないだろう。ただしその詳細については、それら「俳聖芭蕉像」の成立に深く関わっていると思われる、近世中期以降の蕉風復興運動、あるいは明治期における国語教育のありようといったものにも目を向けながら、さらに検証を続けてゆくことが必要である。つまり「細道」の読者論とは、今後享受史という射程の中でさらに論じられてゆくべき課題なのであり、本稿はそのための前提条件を確認したものとして、いわば序論として位置づけられるのである。

注(1)

本稿では、特集テーマに即して、以下便宜的にこの術語を使用し
てゆくが、その意味合いは「作者がその作品を読んでもくれることを
期待していた人々」といったものである。後述する石原千秋氏の言
も参照のこと。なお、具体的な「読者」層については、第五節で検
討を加えている。

(2)

以下に掲げる諸説の出典は次のとおり。(イ) a 阿部喜三男氏
『詳考奥の細道』昭和三年、山田書院(前編総説「二、概観の諸
説」のうち、「虚構」の項、西村真砂子氏「校本おくのほそ道」昭
和五六年、福武書店(第五章「五、己が理想の文学」)、(イ) b 杉
浦正一郎氏「芭蕉研究」昭和三年、岩波書店(第三章「一、奥
の細道」(伝本考)、櫻井武次郎氏「おくのほそ道」成立に関する
一試論」(連歌俳諧研究) 41、昭和四年九月。のち、「奥の細道
の研究」平成一年、和泉書院、(イ) b 村松友次氏「芭蕉翁正筆
奥の細道」平成一年、笠間書院(第五章「結論」)、(ロ) a 白石
梯三氏「おくのほそ道」板行以前の反響―影響史の序説―(『語
文研究』6・7合併号、昭和三年二月)、今永蔵氏「奥の細
道」の成立をめぐる諸問題」(『連歌俳諧研究』95、平成一〇年八
月。のち、「芭蕉研究の諸問題」平成一六年、笠間書院、(ロ) b
復本一郎氏「おくのほそ道」を読む―「草の戸」の「新解釈」―
『笑いと謎』角川選書、昭和五九年)。

(3)

「近世文芸の作者と読者―出版文化と写本文化」(『近世文芸へ
の視座』平成一年、新典社。初出は、「時代別日本文学史 近世
編」平成九年、三省堂、「『武道伝来記』の読者の問題―その誤謬
を受けとめる者―」(『西鶴 研究と批評』平成七年、若草書房。初
出は、神保五彌氏編「江戸文学研究」平成四年、新典社)、「日本
永代蔵」の方法と読者の問題」(『浮世の認識者 井原西鶴』昭和六
二年、新典社。初出は、「日本文学」32―7、昭和五八年七月)な
ど。

(4)

『書誌学談義 江戸の板本』(平成七年、岩波書店。第二章「二
『整版の技法・近世木活』」、「近世の文化と活字本」(天理ギヤラ

リー第一二二回展図録。平成一六年、天理ギヤラリー)など。

(5)

具体的な作品名としては、「枯尾花」(其角編、元禄七年(一六九
四)刊)、「芭蕉翁行状記」(路通編、元禄八年(一六九五)刊)、
『笈日記』(支考編、元禄八年自序)、「韻塞」(李由・許六編、元禄
一〇年(一六九七)刊)、「陸奥衝」(桃隣編、元禄一〇年素堂跋)
などがあげられる。

(6)

引用は、「天理図書館善本叢書 芭蕉紀行文集」(昭和四七年、八
木書店)による。

(7)

引用は、寛文四年(一六六四)版本による。傍線筆者。

(8)

引用は、「新編日本古典文学全集 中世日記紀行文集」(平成六年、
小学館。底本は正保五年(一六四八)版本)による。傍線筆者。

(9)

「海道記」の農村描写について(石原昭平氏編「日記文学新
論」平成一六年、勉誠出版)。

(10)

注(8) 所掲書の、長崎健氏訳による(二〇九頁)。

(11)

以下、「莊子」本文、および林注の引用は、「莊子 廣齋口義」
〔和刻本諸子大成 第十一輯・第十二輯〕(昭和五一年、汲古書
院。所収。底本は寛永六年(一六二九)版本)による。なお原文は
漢文であるが、私に書き下した。

(12)

「芭蕉講座第五巻 俳文・紀行文・日記の鑑賞」(昭和六〇年、
有精堂) 一三三頁。傍点筆者。

(13)

ドナルド・キーン氏著・金関寿夫氏訳「百代の過客」日記にみる
日本人(上)〔朝日選書、昭和五九年〕九頁。

(14)

これは、「細道」の主要な写本のうち、柿衛本・西村本は素龍の
書写であること、また平成八年に紹介された新出本については、一
部にこれを芭蕉自筆と認めない立場が存することを考慮する必要がある、
という意味。一方、曾良本は本文の筆者・墨訂者・朱訂者につ
いて諸説あるものの、最終的に芭蕉自身が本文のチェックをした
という点では共通の理解が得られており、「芭蕉自身の関与がある
程度裏づけられる」というわけである。なお、曾良本のテキストに
は「おくのほそ道 曾良本」(天理図書館善本叢書第十巻別冊。平

成六年、八木書店)を使用し、カッコ内に同書の頁数・行数を示した。

(15) 引用は、『校本芭蕉全集第八巻 書翰篇』(平成元年、富士見書房)による。傍線・傍点筆者。

(16) 以下、『細道』本文の引用は、『新編日本古典文学全集 松尾芭蕉集②』(平成九年、小学館。底本は曾良本)による。

(17) 注(2) 所掲論文、および「おくのほそ道」の登場人物「等翁」の表記の意味するもの「俳句源流考」平成二年、愛媛新聞社。初出は、『麒麟』8、平成二年三月)参照。

(18) たとえば、「晴」の歌の一つとされる「賀歌」について、藤田百合子氏がその対象を「算賀等の対象となる特定の人であつた」と述べられた(『日本古典文学大辞典』「賀歌」の項。傍点筆者) ような例が即座に思い起こされる。

(19) 引用は、『新編日本古典文学全集 連歌論集・能楽論集・俳論集』(平成一三年、小学館)による。

(20) 能勢朝次氏「三冊子評釈」(昭和二年、三省堂)三七五頁。

(21) 「俳句源流考」(前出)一五六頁。

(22) 「校本芭蕉全集別巻 補遺篇」(平成三年、富士見書房)所収。

(23) 尾形仍氏「おくのほそ道評釈」(平成三年、角川書店)二二九頁上段。

(24) 「日記文学の本性と読者意識」(木村正中氏編「論集日記文学」平成三年、笠間書院)。

(25) 「奥の細道」享受史「芭蕉抄」から尾形「評釈」まで」(『国文学』48-8、平成一五年七月)。

(26) 武田鶯塘氏「芭蕉行脚物語」(大正一三年、赤壁吟社)一五六頁。

【付記】引用にあたっては、論旨に直接かわらない振り仮名を省略したほか、適宜濁点・句読点を補ったり、一部表記を改めたりするなどの処置を施した。

新刊紹介

佐藤勝明編・解説

『蕉門研究資料集成』(全八巻)

本集成は、昭和三〇年代ころまでに刊行された、蕉門に関する主要な研究文献を復刻したものである。

全八巻の構成は、『芭蕉の門人 上下』(第一巻、『芭蕉と門人』・芭蕉をめぐる

人々』(第二巻)、『其角』(『風流論』所収)・『俳人許六の研究』(第三巻)、『俳人凡兆の研究』(第四巻)、『俳人丈艸』・『丈艸伝記考説』(第五巻)、『史邦と魯九』・『俳文学研究 抄・大阪と蕉門』抄(第六巻)、『其角研究 上』(第七巻)、『五元集全解』(第八巻)となっている。また各巻末に付される、編者佐藤氏による解題は、各書の内容を簡潔に示すだけでなく、参考文献も充実して有益である。

従来蕉門研究は、芭蕉研究におされるかたちで必ずしも盛況とは言えない状況にあった。しかし、『芭蕉という存在の独自性や普遍性を見極めるためにも、俳諧という文芸の本質を多面的にとらえていくためにも』(第一巻所収「解説」)、この方面の研究は、今後より重要性を増してくるであろう。本集成に収められた各書は、時に従来研究が抱える問題点、今後の課題などを示した、示唆に富んだものばかりである。今回の刊行を機に、俳諧研究に新しい展望がもたらされることを期待する。

(二〇〇四年九月 クレス出版 A5判 揃税込九九七五〇円) [金子俊之]